
夜のウサギ、月に願う

器用貧乏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜のウサギ、月に願う

【Nコード】

N6783Q

【作者名】

器用貧乏

【あらすじ】

ウサギ似の彼女と僕の話。

講義終了のチャイムと共に素早くノートや筆記用具をしまい込み肩の辺りを拳でトントン叩く。今日の授業はこれで終了、サークルもバイトも無い久しぶりに録画溜めしておいたテレビ番組でもみるか、と席を立とうとしたとき携帯がブルブルとメール着信を知らせた。

『2号館入り口で待つ』、陽子からのメールだった。陽子と付き合い出してからもうすぐ一年。ゼミのクラスで知り合って仲良くなり、飲み会の帰りに今自分が出せる全ての勇気を振り絞って告白したら意外にもOKの返事だったのでその場で狂喜乱舞したのを覚えている。「ヒヤッホー！」などと奇声を上げ踊り狂っている僕を不審そうな目で見ている傍観者に堪え切れず、顔を真っ赤にして逃げ出すように走り去っていく陽子の後姿も。

正直付き合いだしてから半信半疑だった。客観的に見ても陽子は明るくて可愛いし、實際他の男子からの人気もあった。どちらかというと言数の少ない僕を彼氏に選んだ理由が——自分から告白したとは言え——わからなかった。それも始めの1、2ヶ月のことで付き合う前と後とでも陽子は何も変わらないかのように接してくれたし、僕も相変わらずその笑顔にドキドキしていた。

早足に2号館に向かうと帰路に着くのであるう大きな人の流れが出来ている隅っこに見慣れた顔を確認した。陽子もこちらの姿が判つたらしく、人懐っこい笑顔で小さく手を振っていた。

「珍しいな、こんな時間まで講義なんて。今日はバイト休み？」

陽子に向かって歩きながら話す。もうすでに空は薄暗くなっていた。

「うん。来年は就職活動しなくちゃいけないでしょ？だから今の内に単位を取っておこうと講義の数増やしたんだ。一気に増やしたからもう頭の中がこんがらがっちゃって」

肩をすくませながら苦笑いした。

「そうか、もう帰れるんだろ？久しぶりだな一緒に帰るのも」

「まあ、それもそうなんだけど少しお願いがあるの。先週新しいテレビを買ったんだけど最近のテレビは設定難しいじゃない？ちよちよつと設定して欲しいなあって」

「ちよちよつて、簡単にそうに言うなあお前は」

呆れたような口ぶりで返事する。

「永嗣くんはそういうの得意でしょ？何とかっていう電気関係の資格も持つてるし」

「そりゃそうだけど、じゃあやるだけやってみるよ。」

「わあ！有難う。やっぱり持つべき者はテレビ設定の出来る彼氏だね」

僕の手を握り、リスやウサギを彷彿させるクリツとした眼をこちらに向けて満面の笑顔で喜んでいる。僕は、その笑顔はズルいな、と苦笑した。

駅に向かい電車に乗る。陽子の住処は学校最寄の駅から2駅先だ。二人とも地方から出てきているのでマンションに一人暮らし、因みに僕の家は逆方向なので帰る際は終電に気を付けなければいけない。電車を降りると空はすっかり暗くなつて、周りは電灯の明かりに彩られていた。それも住宅街に入るとまばらになる、一灯一灯に存在感が出て外套の明かりも何か誇らしげに照らしている。

「今日は満月なんだね。ほら、あんなに丸く見える。ウサギさんがペタンペタンお餅をついてるかもしれないね」

陽子が月を指差しながら話し出す。見てみると確かに綺麗な円を描いて輝いている。しかし後者の意見は頂けない。

「あのなあ、本気で月にウサギがいるって思ってるんじゃないだろうな？月に生命体が存在しないことはすでに証明されているんだぞ。アポロ11号だったか12号だったかが初めて月面着陸したときの有名な映像とアームストロング船長の名言があるだろ。『小さな一歩だが人類にとって大きな飛躍である』だったかな。第一月面の模

様に関しても『ウサギ』と判断するのは一部の地域だけで、『本を読む女性』であつたり、『片腕の蟹』だつたりする地域もあり」
「わかつた、わかつたよ。私も本気で思つてゐるわけじゃないから、ただいたらいいなあつて思つただけだよ。本当に永嗣くんは夢が無いんだから。」

僕の話を遮りため息をつきながら首を振る。そして話を続ける。

「永嗣くんの夢って何？」

「夢かあ、とりあえず勉強して少しでも良い会社に入ることかな。」

「ぼんやりと浮かんだ事をそのまま返す。」

「ふうん、じゃあその後は？後2年で卒業だから永嗣くんの言う夢は遅かれ早かれ結論は出るよね」

「その後」

今度はぼんやりとも浮かんでこなかった。仕方なく言い訳する。

「今は思い浮かばないな。」

軽い調子で返答する。

「思い浮かばない、じゃなくて『思い浮かべることができない』んじゃない？」

陽子も冗談っぽい口調で言い返してきた。

しかしその瞬間僕の胸には鋭利な刃物が突き刺さつたかのような痛みと衝撃を受けた。思い浮かべることが出来ない、凶星だつた。会社に入つてどうするのだろう、何を目標として生きていくんだろう。当たり前前の事だがよく考えてみればそうなんだ、数年後決まってしまう夢なんて数年後で消えて無くなってしまう、その後の人生のほう遥かに長いんだ。目標を見失つてしまった人間は糸が切れてしまった凧のようにフラフラと風に流され、最終的には墜ちてしまうのだろうか。

「私何か変なこと言つた？」

陽子が不思議そうな顔で覗き込むように首を傾ける。

「ああ、いや何でもないんだ」

頬を引きつらせた笑顔で誤魔化す。疲労を吐き出すように大きく息をついた。

家に着くや否や陽子は投げ出すように靴を脱ぎワンルームの短い廊下を駆けていく。その後ドア越しから「よしよし」「元気だった？」と声が聞こえる。僕は「お邪魔します」と小さく呟きながら部屋に入ると、そこには陽子に腕にすっぽりと抱きかかえられている小さなウサギ——ネザールンドワーフという種の茶色のウサギ、名前は『ミル』——が指であやされて気持ち良さげに眼を閉じている。

「そうやって抱っこしていると親子に見えるな」

微笑みながら言って、ダウンジャケットを脱ぐ。

「何？それってバカにしてるの？」

怒ったような表情を見せながらも嬉しそうにミルと頬を寄せる。

ただ可愛いつて言いたかったただけなんだけど。

そんなやり取りもそこそこに早速テレビ設定に気持ちを切り替えた。陽子には申し訳ないが今日は早く自宅に戻りたいという気持ちが強い。『思い浮かべることが出来ないんじゃない？』という言葉が喉の奥に刺さった魚の骨のようにチクチクと痛み出し気持ちを暗鬱とさせていた。

設定は説明書を見て難なく終わらせた。一般的に女性が電気関係に弱いということは知っていたがこれほどまでとは、まあ陽子は抜けている所があるので特別なのかもしれないが。僕がテレビと向かい合っている間、陽子は夕食を作ってくれていた。野菜たっぷり、のミネストローネ、野菜嫌いで家では全く手を出していない僕の食生活を見透かしたようにイジワルなメニューだ。食台に料理を並べている陽子と目が合ったとき、いたずらっぽく笑っていたから確信犯であることは間違いないが気を遣ってくれていることには素直に感謝した。

食事も終わり一服したところでそろそろ帰ろうか。時計を見ると10時前、明日も1時間目から講義があることを考えるとそう長居

もできない。皿を洗っていた陽子にその旨を伝え玄関に向かおうとすると、ドタドタとすぐ後を追いかけてきた。

「ちよっと待って、ミルの具合が悪いみたいなの。」

明らかに動揺している声。履きかけた靴を元に戻しミルのいる部屋に入った。

ミルの様子を観察する。終始目を瞑っており隅っこの方でじっとしたままだ。体は若干震えていて時折「クシユン」とくしゃみにも似た声を出している。今までと様子が違うのは明らかだ。風邪？ウサギに風邪なんかあるのだろうか？いや、今は素人考えで判断すべきじゃない。

「とにかく病院へ連れて行こう。ここから近い動物病院は？」

「ここから歩いて10分くらいのところにあるけど、もう閉まっちゃってるよ。」

陽子はすでに涙をボロボロ零している。そうか、あまりに急に言われたので夜だつてことを失念していた。しかし夜遅く急病にかかる動物だつて少なからずいるはずだ。ということは、

「夜間に急患を受け入れてくれる病院があるかもしれない。陽子は電話帳で調べてくれ、僕はインターネットで検索してみる」

そう言われた陽子は脱兎の如く電話帳の元に駆け出し、ものすごいスピードでページをめくり始めた。それを見た僕も急ぎ足でノートパソコンの電源を入れ検索を試みる。その結果、

「一番近くても郊外なのか」

うーん、と無意識に唸り声が出る。ここからだとな車でも優に1時間はいかかってしまう。陽子は震えているミルを見かねてタオルを何重にも包んで少しでも体温の低下を防ごうとしている、その表情はまるで子を心配する母親のようだ。

「よし、陽子はこの病院に連絡してミルと出掛ける準備をしておいてくれ。僕は今から家に戻って車を取ってくる」

そう言い残すと陽子の返事も聞かずに部屋を飛び出した、悲しい顔を見るのが辛かった。

電車に揺られている時間も車で陽子の家まで行く時間も、いつもの十倍ぐらいかかっているのではなからうか、と思うぐらい長く感じる。通り過ぎる全ての人が幸せであるかのような劣等感にさいなまれ終始落ち着かなかった。

マンシヨンの前で車を停車させると陽子は既にケージを抱えて待っていた。随分長い時間外気に触れていたのだらう、部屋で見たミルと同じように小刻みに震えていた。ケージ越しにミルの様子を窺う、体はタオルに包まれて判らないがトロンとした目つきは相変わらずで体調が良くないの是一目瞭然だ。陽子を助手席に乗せると病院の住所を確認し、カーナビに入力する。「行くよ」と陽子に声をかけると無言で頷いた。

病院に向かう間陽子は抱きかかえているケージに向かってボソボソと呟いていた。最初は聞き取れなかったのだが耳を傾けていると何とか聞き取れた、「頑張つて」「また遊ぼうね」と。フロントガラスからちょうど斜め上に白く輝く月が見える。ケージの上に手を置いて目を瞑っている陽子はまるで月に願っているかのような、ウサギの模様に浮かび上がらせている満月に。僕は病院に着くまで一切口を開かなかった。

病院の玄関付近で停車して陽子だけを先に降ろす。停まった途端パツと目を開けた陽子はケージを片手に受付に駆けて行った。僕は横手にある駐車場に車を止め後を追う、突き刺すような冷気が体をこわばらせた。

院内に入るとミルは既に受診中らしく応診室のドアの向こうから医師らしき人物と話をしている陽子の声が聞こえた。途中で割り込むのも悪い気がして待合の長椅子に腰掛け待つことにした。ここまですばたきだったので一息付くと急に疲労がドツと押し掛かってくる。首筋のコリを解すように2、3度揉んだ後目を瞑った。

陽子のことを考える。あんなに泣いている姿を見るのは初めてだ、ミルに対しての愛情の深さが窺い知れる。いや、それだけではない。普段は皆と明るく接しているのだが、ふとした瞬間に見せる憂いを

帯びた瞳と表情。ミルはそういう陽子の不安や悲しみ、孤独な寂寥感などを和らげてくれる大切な存在なのだろう。僕もその心の中に入っていくことが出来るのだろうか。

「ごめんね、待たせちゃったね」

その声にパツと目を開けると、空のケージを持った陽子が横に座っていた。

「どうだったんだ、ミルは？」

「軽い感染症にかかっているみたい。けど命に別状はなくて1日入院して様子を見るって。はあ、良かった」

陽子はホツと胸を撫で下ろす。その表情は病院に来る前よりはるかに柔らかくなっていった。

「そうか、良かった。じゃあ今日ミルは病院でお寝んねか。淋しくなるな？」

「ううん、いいの。ミルが元気になってくれるなら1日くらいなんてことないよ。それより わっ、もうこんな時間だ。ごめんね明日、じゃない今日も学校なのに付き合わせちゃって。」

「そんなことはどうでも良いよ。俺もミルが元気でいて欲しいからそう言つと陽子は涙を湛えながらもニツコリと笑った。

医師にお礼を言つて外へ出た。空気すらも凍ってしまうのではないかという程の寒さ。「寒いね」陽子が寄り添って来たので肩を抱いて歩く、甘い髪の香りがフワリと鼻先を通つていった。

帰りの車内も行きと同じく口を開くことは無かった。気疲れたのか陽子はすぐに眠ってしまったのだ。今日は泣いたり笑ったり大変だったんだな、とこちらも自然と笑みがこぼれる。

『思い浮かべることが出来ないんじゃない？』

ふと頭の中をよぎる。しかしそれは直ぐにシャボン玉のように割れて消えて無くなった。そう 見つけたんだ、夢を。君を、陽子を

幸せにしたいんだ。どうしても、何としても。

赤信号で停車する。陽子の方を見るとまるで子供のような無邪気な顔で眠っていた。その目線の先には月が、白く泰然と構えている月が煌煌と輝いていた。

了>

<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6783q/>

夜のウサギ、月に願う

2011年2月5日21時55分発行